

【一般演題2】 第7席

「『甲乙經』諸版本の性格」

宮城 松木 きか

『黃帝三部鍼灸甲乙經』略称『甲乙經』は、晋の皇甫謐の撰によるとされる鍼灸医学書であり、その序文によれば、『鍼經』・『素問』・『明堂孔穴鍼灸治要』の三部の書の内容を整理し、選択して編纂された。

同時代の鍼灸学の体系を考えるうえでも、また「黃帝内經」の成立と伝来を考えるうえでも、さらには宋代以降の医学のあり方を知るためにも、重要な書物である。医学史の中核に深くかかわる問題を提供し答えを出し得る書物でありながら、必ずしも十分な検討がなされてきたとは言い難い。研究を阻んできた要素は種々考えられよう。

北宋の新校正序に当時の『甲乙經』に多くの脱落や錯誤があったことが誌されており、現在の通行本から原『甲乙經』を求めることが難しいことは、もちろん挙げられるであろう。

しかし、現在の我々が『甲乙經』を読もうとした場合、まず困難を感じることはもっと足下の問題である。所謂「医統正脉本」、東洋医学善本叢書によって我々に親しいものとなった所謂「正統二年本」・「明抄本」等の諸本の差異をどのように考え方あわせていけば良いであろうか。

本発表はこの基本的な問題に直接の答えを出すものではないが、その問題に迫る第一歩として、諸本の性格の差異を明確にし、『甲乙經』読解の手順に一定の基礎を提案したいと考える。